

1 黒星病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は枝の病斑で越冬し、4月頃から胞子を形成する。
- 2 降雨時に感染するが潜伏期間が30日～40日と長い。
- 3 低温多雨の条件下で発病が多い。

B 耕種的防除法等

せん定時に発病枝を取り除き、発生源を少なくする。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

防除の重点は4月上旬から5月下旬である。防除時期を失しないよう注意する。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
4月上旬～5月下旬	ベンゾイミダゾール系	1
	DMI剤	3
	QoI剤	11

2 灰色かび病

A 生態と防除のねらい

- 1 花卉に発生した菌が元となって、果実や葉に病斑を形成するが多い。
- 2 落弁期に降雨が続くと発生が多くなる。

B 耕種的防除法等

園内の通風採光を図り、過湿にならないように注意する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

降雨前の予防散布に重点をおく。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
3月上～中旬	ジカルボキシイミド系	2
	チオファネート系混合剤	10・1
	QoI剤	11
	グアニジン類	M7
	グアニジン類・抗生物質混合剤	M7・19

3 かいよう病

A 生態と防除のねらい

- 1 伝染源は枝の病斑である。
- 2 病原菌は細菌であるので、多発すると薬剤防除だけでは発生を防ぐことが難しい。

B 耕種的防除法等

- 1 せん定時に発病枝を除去する。
- 2 園内が過湿になると発生しやすいので、排水に努める。
- 3 台風や強風雨時は本病の発生を助長するので、防風対策を行う。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

開花前の休眠期と開花直後から幼果期の防除に重点をおく。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
4～5月	抗生物質	4 1
収穫後	抗生物質	2 5
	抗生物質混合剤	4 1・2 5
1 2～1月 (葉芽発芽前)	銅剤	M 1

4 アブラムシ類

A 生態と防除のねらい

ウメには多くの種類のアブラムシ類が寄生する。主な種類はモモアカアブラムシとモモコフキアブラムシであり、モモアカアブラムシは葉が縮れ、モモコフキアブラムシは葉に群生し、すす病とともに寄生部位はロウ物質で白く汚れる。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

防除が遅れると葉が縮れるので、発生初期の防除を徹底する。

使用時期	農薬系統・一般名	IRACコード
発芽展開期～5月下旬	ネオニコチノイド系	4 A
	ピメトロジン剤	9 B
	フルニカミド剤	2 9

5 ウメシロカイガラムシ

A 生態と防除のねらい

幼虫は、4月下旬から5月上旬、6月下旬から7月上旬、8月下旬から9月上旬の3回発生する。

B 耕種的防除法等

- 1 ヒメアカホシテントウムシなどの有力な天敵を保護し、天敵に悪影響の小さい薬剤を選択し防除する。
- 2 寄生が多いと防除効果が低くなるので、ワイヤーブラシなどでカイガラをこすり落とす。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

成虫に対する効果は低いので、幼虫期に防除を行う。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
1 2月	マシン油乳剤	なし
開花前	石灰硫黄合剤	UN
4月下旬～5月上旬	ネオニコチノイド系	4 A
6月下旬～7月上旬	有機リン系 ネオニコチノイド系	1 B 4 A
8月下旬～9月上旬	有機リン系 昆虫成長制御剤	1 B 1 6

6 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

A 生態と防除のねらい

- 1 チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシが主体である。園周辺のヒノキ、スギの球果に産卵して、幼虫期を過ごす。
- 2 越冬してきたカメムシ類が果樹園に飛来し被害が発生する。越冬量が多い年には、幼果期から収穫期まで飛来が続くので注意する。
- 3 年によりその越冬量や次世代の発生量が大きく異なるため、生育期を通し注意が必要である。

B 耕種的防除法等

ヒノキやスギを防風樹にしている場合は、管理を徹底し、結実をさせないか、できるだけ除去する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

- 1 地域や園の条件でも飛来密度が異なるため、5月から6月にかけて園内を良く見回り、発生を認めたら、直ちに防除を行う。
- 2 病害虫防除所からのカメムシの発生情報（病害虫防除所のホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>））に注意し、防除を行う。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
5月～6月	ピレスロイド系 ネオニコチノイド系	3 A 4 A